
神様と会ったかもしれない日

彰子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と会ったかもしれない日

【Nコード】

N0382F

【作者名】

彰子

【あらすじ】

二月十七日。バレンタインデーより三日。ふられた。ああ、ふられたよ完膚無きまでにね。だからって自称神のオタクとどうしてキヤッチボールをしなきゃならないんだ？

（前書き）

注意：この主人公の混乱癖は激しく筆者に似ております。

二月十七日。この日、私は神に会った。

遺書。

前略、神様。

あなたの存在を私は認めません。

ええ、認めるものですか。

だれがなんと言おうと、あなたのような存在があつてはならないのです。

だって、私がふられたから。

あなたにこびて、こびて、こびまくったのに、ついでに近くの神社を経由して千円の贈賄までしたのに、ふられたから。

草々

追伸 あなたがもし存在するならば、これから私はあなたの元へと旅たたなくてはならないはずですが、大丈夫です。だってあなたは存在しないから。私はあなたの間抜けな顔を拝まずにそのまま未来の地球へ復活し、七つの玉を集めてくれた未来の彼と結ばれるの。オッス、それじゃみんな、元気でな（悟空風）

私は五十三枚目の遺書下書きを丸めて窓から投げて捨てた。
ああ、ばかなことを書いてしまった。

私の名前は石山多恵。

彼氏に先日ふられた石山多恵。

しかも、浮気の相手のほうがむしろ本当の彼女みたく「あんた誰」
つてな態度で公園で彼氏とキスしてたからそいつに逆切れしたら彼
氏が本気であの女とぐるになって「お前は誰なんだよ」つてな態度
に出てきたからご挨拶程度に軽くビンタを食らわしてやったらパン
チでお返事が来て一本歯が抜けたから妖精が金貨をくれないかなと
夢見てるのと友達に相談したらドン引きされて誰にも連絡がとれな
くなって悩んでいるところへあの女から「消えろ」のメールが来た
からちよつとテンションが上がって「あんなやつのは忘れたも
と一度友達になりませんか」とさわやか系のオーラを出してメル強敵に
なつてから一気に地獄の底へご案内するつもりだったのに返事が「
失せろ」だったのであこれは彼氏だなと持ち前の直感力セレンセンシスで気づきパ
ソコンからそのアドレスへ別の女を装って破局に導こうとしたのに
逆にやつらは業者に頼んで私の忠実な相棒であつて水谷豊ではない
パソコンを再起不能にしたため丑三つ時に神様とやらに千円の賄賂
を渡してやつらが永遠に愛を誓えないようにしてから近くのコンビ
ニで買ってきたガリ　リ君をガリガリいわせてやつたら流石に冬に
ガリガリはねえだろうと胃が悲鳴を上げたので急いでトイレに駆け
込んだらそこで白い朝を迎えた、石山多恵。

トイレで泣いて、鼻をかみかみ泣いて、ラジオから流れる工藤静香
の『泣いて』をバックミュージックにして泣いて、遺書書いて死の
うと思つて泣いて、実行できないから泣いた、石山多恵。

そうです、わたすが石山多恵どうえす。

言つてみただけだから。志村けんのつもりで言つてみただけだから。

泣いた。

泣いた、笑った、そして泣いた。ありがとう、オリンピック、感動をありがとう。

言ってみるもんだ。

私、石山多恵はオリンピック気分を一瞬だけ味わった！
感動がよみがえった！
…腹が減った！

まったく、私の胃袋つたらき・ま・ぐ・れ（キラッ）

そんな穏やかな引きこもり生活三日目の朝に、チャイムが鳴った。

うふふ、私が最高に落ち込んでいる時に一体誰かしら？
つまらない訪問販売かしら。

それともあの女かしら。
それとも愛しの彼氏？

はたまた全然連絡をよこさない冷たい友人たち？

いずれにしても殺^やつてやる。

私はドアを開けた。

「石山多恵かね？」

「どなたですか」

「私が神だ」

そしてドアを閉めた。いつけね、肝心の包丁を用意してなかったよ。

「おい、何だ、せつかく会いに来たというのに」

『むーかいのお宅に住んでる、年齢不詳の自由人

あーいつはあいつはオタクなとしうーえの男の子

二十四時間ネットゲ三昧、二次元だけが好きなの

ぶいいーあーるわーいえぬいーあーるでいー(very nerd)

にんーげんとして、どうかしら

はーつきり聞かせてー』

キャンディーズの往年のヒット曲に乗せてお向かいさんの印象を歌ってみました。

って、なんでそんな男が私のアパートの前に現れるのよ？

私はおずおずともう一度ドアを開けた。

「あの」

「私が神だ」

『何が私がかみだだよ何気なくかみとかいっちゃって何様のつもり
ってあ神様があははそうだよね神様だよね私ってばかーでもさどう
して神様が現れちゃうわけ不思議よねまじでこんなしがない失恋派
遣社員のところにどうしてきちゃうかな神様がそっかー神様ってき
まぐれだもんねーじゃさ私の失恋もてめえのきまぐれというわけか
えこらどうなんだよてめえなまはんなかな答えじゃ許さねーからな適
当なことを言っでんじゃねーよそこんとこどうなんだ顔か私の顔が
原因でこんなひどいふられ方になったのかそれともあれかスタイル

とかかばかやろう自分で言うのもなんだがどっちもけっこういい線
いってるぞばかやろうあれ言っちゃったよおい言わせちゃったよお
いおいしかも断っておくがおいおいって言ってるけど私は中尾彬の
物まねをしてるわけじゃないからおいおい言わせているのはためえ
の唐突でしかもそのなりでいうと全く似合わない「自称神様」発言
だからだいたいそのうつとうしい長髪を切れよってあまさかかみか
みつながりで切れないとか言っんじやないよなまさかとかくあん
たが神様ってどういうことだよつつつかえまじであの神様？」

私の頭の中を駆け巡った混乱はだいたいこんな感じだ。

男は続ける。

「まず質問について答えよう。君と彼氏はもともと性格が合わなかつたのだ」

「お帰りください」

なんだこのやろっふざけたやろっだこのおたくやろっは！

「それからこの男が髪を切らない理由は、お気に入り散髪屋にホモセクシャルの理髪師がアルバイトとして雇われていてそのアルバイトに散髪される間ずっといやらしい言葉を投げかけられ続けたために、その散髪屋だけでなく散髪という行為全体にトラウマを抱いたことによるのであって、かみかみなどという冗談のためではない。そもそも、この男は私の」

私、石山多恵は左手に隠し持った包丁で正当防衛として相手に斬りかかった！

「…ことなど全然考えたことはなく、むしろ頭の中はアニメの中の女子に対する情熱と妄想でいっぱいだ。しかし君も無茶なことをする。これでこの男が密かに家でカポエラを習っているということにしないでほしい」

皆さん、『飢狼伝説』ってゲーム、ご存じですか。スーファミで発売されたこともある格闘ゲームなんですけど、私、そのスーファミ版の最初のやつをやったことがあるんですね。その後の続編はやったことがないんですが、なんかカプエミみたいなところで戦ったのを覚えてます。そこで確かカポエラとかいう格闘技を使う敵キャラクターと戦ったというの覚えています。名前は忘れましたが、そのカポエラ使いは半裸のおっさんで、気持ち悪くなるくらいに足を動かして私の操作するテリー・ボガードに攻撃を仕掛けるわけなんです。ま、必殺技のバーン・ナックルで瞬・殺ですけれども。

伝わる人にしか伝わらないかもしれないけど、もしその足技みたいなのが目の前のさえない長髪のおタクによって繰り出されたとしたら、どうします？　それで頼みの綱である武器が手から弾かれたとしたら、どうします？

セコムしますか？

かわいい叫び声を上げて助けを呼びますか？

私は叫びました。

「ぐおおおおおおおなんだよおてめえはああああ」

「私は神だ。君が私にひどいメッセージを送るから、思わず来てしまったんだよ」

「そういうことをきいてんじゃねえんだよおお！ てめえはだいたい神でもなんでも…は？」

「信じてくれない方が好都合だ。…どうしたんだ？」

私は頭を回転させてこれまで男の中で交わされた会話をもう一度思い起こした。

そして愕然とした。

「私の気持ちがなぜわかるの…？ なぜ私が失恋したことや、どうせあんたがくだらない連想で髪を切ってないんだろ…という予想までわかるの？」

「神だからだ」

足をぐるぐると回すカポエラ独特の踊りを披露しながら答えるサラッサラヘアの男。

「まさか、本当に…？」

「いや、信じなくていいよ。というより、信じてもらっては困る。一つ合理的な答えを用意しよう。第一に、君が失恋したことはこの近所ではちゃんと噂として出回っているし、しかも君自身がそれを窓から投げ捨てた五十三枚の遺書で保証している。第二に、君だけでなく、この男を見た瞬間に誰もが髪を切れと言っただろ…という予想が男自身にもあるでしょう。そんな男が自分を神様だと言い始めたら、理性のある人間ならばまず「だから髪を切らないのか」という冗談めいた結論を考えつくだろうという予想が男にも立つわけだ。しかし、このような面倒な説明をするのはやっかいだから、男が読

心術を使える、ということにしよう」

体をのけぞらした状態でぺらぺらとよくしゃべる。

あ、そういうことね。

「…ああ、そうですか。つまりあなたは私のストーカーというわけですか」

「なぜそのような理解になるんだ…？」

「だって、そうでしょう？ 初めて三次元の人を愛してしまった、それが私だった。そうでしょう」

「いや、だから」

「そうに違いない。かわいそうに。私の美貌に見とれて気が狂い、ついに数年間出られなかった部屋を後にした。そして私の部屋の前まできた。ところが自分には自信がないものだから、テンパって思わず自分は神であるなどとデストマがいの発言をしてしまった」

「……」

『私の失恋やちよつとした機微がわかる理由はあなたが私の熱烈なストーカーだからできつとこれまであの部屋の中ですつと私を望遠鏡で観察していたに違いないわさらにあなたは私のごみばこをあさったり毎日の行動パターンを綿密に調べたりしたんだわああ怖いしかもついにいきつとところまで来てしまったでも悪いのはあなたじゃないわまるで私がアニメに出てくるちゃんのように美しいからあなたは精神を乱されてしまったのね私って罪な女かわいそうに

すべて私が悪いんだわそうこの美すぎる私が』

「……とにかく、この男が神ではないと思ってくれればそれでいい」

立ち上がった男はやや真剣な表情でそう言った。

「で、用件は何ですか？」

自分を第三者のように呼ぶかわいそうなストーカーやろうなので、私は少し話を聞いてやることにした。

「キャッチボールでもしないか」

「はい？」

「キャッチボール」

いつのまにか男の両腕は、グローブ二個とボールを抱え込んでいた。

「日の光を浴びるのもいいものだ」

「結構です。私の家には松崎しげるもびっくりな紫外線照射装置がありますので」

「嘘はやめておけ」

はいきた命令口調。

『は？ おいおいおい何か勘違いしてないかこら私はただかわいそうなストーカーやろうにただ慈悲を垂れているだけであって別に1

パーセントの好意すらてめえには抱いていないわけでそんなやつとキャッチボールなんぞする必要はさらさらないしかも私は今日体調が悪くて寝こんでいるという体で会社には連絡してるんだそれが外でキャッチボールなんかした日にやあどうよ近所中の噂どころじやねえんだよ悪くすりや首になっちまうだろうがてめえもストーカーならそれくらい調べてもつといいタイミングの時に誘いにこいやまあその場合でも即お断りだがなさらに言わせてもらえばもっとましなデートに誘え金のかかるやつなショッピングとかショッピングとかええい面倒だなみつけお前私にみついでしまえじゃんじゃん金を使って私を喜ばせるようなことをしてみろそれくらいいつもフィギュアにつき込んでいるだろうとにかくキャッチボールってどういうチヨイスだよ?」

「よく映画であるだろう、キャッチボールで心の交流をとるいう場面が」

遠い目をするストーカーやろう。

「あの一、あなたと心の交流なんぞ必要ではない私ですが」

「神とキャッチボールだぞ。こんな機会はめったにない。いいから、キャッチボールをするんだ。どうせ暇だろう?」

かわいそうに。このストーカーやろうはアニメと同じように女の子とキャッチボールをするのが夢なんだ。

「いいですよ」

「そうか、では早速河原に」

「それでもいうと思ったかばけがああああ」

勢いよくドアを閉めた。

部屋に帰った。

テーブルにつつぷした。

彼からのメール。

スーツを着たいい大人が中指を立てた写メール。

愛していないのサイン。

夕方になった。

あの男はきつと河原にいる。

そう思った私は、興味本位で河原へと向かおうとドアを開けてみた。

「お、気が変わったか」

やつが、いた。

何時間ここにいたんだろう？

負けた。根負けした。私以上にしぶとい執念を、この男は持っている！

「ええ、行きましょう」

そこで私はこの男とキャッチボールをすることになった。

人生、何が起こるかわからないものだ。

私は夕日を背に、グローブをはめる。

「よし、それでは始める」

オタクがボールを投げた。私はそれを受け取る。

「ナイスキャッチ」

オタクと河原でキャッチボール。我ながらシユールな光景だなと思う。

「あんたさー、暇だねー」

剛速球を投げながら、私は話しかける。

「…危ない投げ方だな。弁慶の泣き所付近に当たるところだったぞ。」

おお、小学校の頃これをとれる男子はなかなかったのに。

「それでも神だからね。忙しいには忙しいさ」

緩いカーブを作ってボールが飛んでくる。

「じゃあさ、仮にあんたが忙しい神様だとして、何で私とキャッチボールしてるのよ」

私は全力で、すねを狙う。

「…君はいつでも闘争本能をむき出しにするな。…神にだって、仕事がいやになる時だってあるさ」

緩いボールばかり投げやがって！

「たとえばどんなことだよ」

私はキャッチするとすぐに投げ返す。

「地球…温暖化とか、…世界で戦争がなくならないこととか」

「あんた仮にも神様だろうが！ 何とか…しろや！」

「おいっ！ 意地でもすねを狙うのはやめろ！ 色々事情が…あるのだよっ！」

「どんな…事情だよ！」

いつのまにか私たちは本気で投げ合うようになっていた。

「たとえば！ 君たち生物の理解の外に生じるようなことは…起きなかったとされてしまうこととか」

「どういう…意味だよ！」

「いつも…試してはいるんだよ！ 地球を完璧な楽園にしてみるとか、戦争を人間の本能からなくすとか！」

「できて…ねえじゃねえかよ！」

「いや…できてはいるんだが…、ふう、それは結局君たちの意識には登らない。君たち人類が一部は発見している宇宙の原理にのつと

つていない現象が起ると、この世界は眠りについてしまうのだ。
そして私はまた世界を元の状態に戻すしかなくなる」

「なんだそりゃ。RPGのやりすぎじゃないの？」

気が抜けた私はとてもスローなボールを投げた。

「そもそも一部の変人をのぞけば、私の存在をそのまま受け入れる人間だっていない。人は、理解できない現象は、夢かマジックとして受け入れるものだ。君だって、私が最初にそのままの姿で現れたときには『これは夢だ』と思い込んで卒倒してしまっただじゃないか」

「なにを…わけのわかんないことを言ってるのよ」

「君にその記憶がないのも当然だ。いいかい、私は君のところへ五十二回訪れている。なぜか？ 君が私にその回数分遺書で『きさまの顔など拝むか』等々の呪詛をまくしたてたからだ。ところが、私自身として君の前に現れたときの君は、たいてい夢と思い込んで卒倒するのだ。そして記憶を失う。だから、私は君にとって理解の範囲内である『オタクの男が自称神として目の前に現れる』という選択をした」

こいつ、もしかしたらやばい宗教の勧誘でもしにきたのかしら？

「違う」

じゃあ、そんな苦勞をしてまで神様が何をしにきたのよ。

「人生は捨てたものじゃないと言いにきたのだよ」

そんなこと教えてもらわなくても知ってるわよ、このストーリーやろっ。

オタクだけがしゃべる奇妙な会話。グローブがボールをとらえる音。

「そうかね。君は人生を捨てようとしていたんじゃないかね。たかがひどくふられた程度で」

そうだとして、それがあんに何の関係があるの。

「確かにそれほど関係はない。だが少しむっとくるじゃないか。一生懸命改善しようとしている世界に存在する人間が、私を呪いながら死ぬなんて」

……。べつに私、この世を去るつもりないですから。

「それならいいんだ」

沈黙。

キャッチボールだけが続く。

日が暮れてきた。

「映画の受け売りだが」

男はボールを投げながら切り出した。

「人生はキャッチボールに似ていると私は思う」

投げ返す。

なにいきなりくさいこといっちゃってるのこのおたくやろうは？

「別に何かをきそうわけではないんだ。投げる、受け取る、投げる、受け取る。それを繰り返すことに意味がある。呼吸もそうだ。吸うと吐くのを繰り返すことに意味がある」

恋愛でもそうだ、とでもいいたいわけ？

「そうだ。しかし、いつかキャッチボールもやめなくてはならないときがくるだろう？」

……。投げ返す。

「さっき、人生はキャッチボールに似ていると私は言った。だが、人生はもう少し複雑で、キャッチボールといっても、それは二人だけでやっているものとはたいてい違っていている。たいていの人生は、さまざまなものや人と、さまざまな方向で同時に行っているキャッチボールに似ている」

だから何？ ボールを受け取る。

「一つのキャッチボールが終わったからといって、すべてのキャッチボールをやめる必要はないということだ」

私は泣きそうなのをこらえて『だれがほかのキャッチボールをやめたっていうの』と心の中で強がる。

「いいや、そんなことはだれも言っていない。現に私とキャッチボールをしている。そして、これから君はほかの人々とキャッチボールをしていくことになる」

「…あんだ、本当に神様？」

投げ返す。

「…まあ、そうでもないさ。…それじゃあ、ここでお別れするでしょう。ああ、この男が向かいの家に当分戻らなくても気にする必要はない。合理的な説明を君に与えておくとするば、この男はこの後ひさしぶりに外に出たのを喜んで早速マンガ喫茶へ直行し、その後数日間を難民として過ごすことになる。では、ごきげんよう」

男は走り、そして見えなくなった。

私はグローブを男に投げつけた。

「このぼけがあ、かつこつけてんじゃねえよお」

暗い土手に、何かがぶつかる音がした。

「人間にものをぶつけられるのははじめてだ」

空に声が響いた気がした。

動揺した声がちょっとおもしろくて、笑えた。

私は家に帰り、眠った。

次の日から私は生活を元に戻した。

結局、その日起きたことが非現実的すぎてそれが夢だったのかどうか起きてみると判別がつかなくなっていたため、あのストーリーカーや

ろつが神様だったのかどうかは不明だ。そもそも冷静になつて考えれば、ストーカーだからといって心が読めるはずもないのだ。私はその日のことを思い出すと、いつも混乱して考えるのをやめてしまふ。

そんなわけのわからない日とは無関係に今日は始まる。

そして私は今日もいろんな人とキャッチボールを続けている。

（後書き）

おもしろいコメディが書けない（ついでに言つとエアーマンが倒せない）
ご容赦。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0382f/>

神様と会ったかもしれない日

2011年1月12日21時36分発行